「狂言」を通じて「日本の教えの文化」が世界に伝わっていく。

2009年8月10日～19日の日程で、社団法人国際演劇協会主催の「ITI伝統芸能ワークショップ」が行われた。このイベントは毎年、日本の古典芸能を一つずつ取り上げ、俳優や演出家などを目指す国内外の役者たちに日本の一流の先生が直接指導するという試みである。

講師、設備ともに他では体験できない研修内容。

スキンヘッドの外国人女性を含む数人の受講生たちが深々と腰を落とし、能舞台の橋掛かりを歩いていく。そこへ日本人の講師から叱咤の声が飛ぶ。今年で21回目を迎える「ITI伝統芸能ワークショップ」の練習中のひとこまである。

今年の題材は「狂言」。「能」と併せて「能楽」として知られているが、能が貴族社会の悲劇を描くのに対して、狂言は一般民衆の営みをテーマとした喜劇になっている。

主催する社団法人 国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター 国際理事の小田切ようこさんは

「能楽全体として学ぼうという人は多くいます。能と狂言の双方を知ることによって理解も深まりますし、芸を深めることにつながるのです」と説明してくれた。

事実、前年度の「能」を受講したあるドイツ人は、どうしても狂言も学びたいということで今年も参加した。このワークショップでは他では得られない貴重な体験ができるため、高い渡航費を払ってでも来たいというのだ。同じように熱意を抱く17人の受講者が集まってきた。

その中身がすごい。講師には人間国宝の野村萬先生を始め、野村万蔵一門の先生方が並ぶ。稽古場は梅若能楽学院会館を10日間借り切った。一流の先生の手本を見て、指導を受け、稽古場も能舞台も自由に使うことができるのだ。ちょっと贅沢な感じだが、集中して指導するにはこのくらいの環境が必要だという。

研修は「棒縛」「口真似」「盆山」「茸」を中心に進んだ。セリフや所作・構成を含めて最も狂言らしくシンプルでありながら、洗練された演目である。さらに基本的な発声と身体の使い方を学ぶために「狂言小舞」を練習し、めん・装束つけも行うというものである。そのめんと装束も国宝級のものが使われる。確かに他では体験できない内容だ。

外国人の場合は、日本語、ローマ字、意味を解説した英語で3段になった専用のテキストが用意される。これは国際演劇協会のオリジナルで、その作成にはもっとも腐心するそうだ。

野村萬先生を始め、野村万蔵一門の先生方が指導にあたる

「レッスン」にはない教えの文化が「稽古」には存在している。

外国人にとっては言葉の問題だけでなく、発声方法も壁になる。腹式呼吸に慣れていないため、そこから学ばないと2日目には声がかれてしまう。帯締めや腹を据えた立ち居振る舞いという所作にもなれていないので、最初はどうしても腰高になってしまうそうだ。

しかし、受講生の熱意や協会の細かい配慮もあり、最終日の発表会では先生方も驚くほど、一糸乱れぬ芸を披露した。「日本人でも短期間であそこまで上達するかしら」と小田切さんも思ったそうだ。

真剣な表情で受講する生徒たち

最終日の発表会で一糸乱れぬ芸を披露

こうして研修を終えた受講者たちだが、実はさまざまな思いで受講していることがわかった。役者としての素養を高めるというのが一般的だが、過去には自国語で歌舞伎や能の脚本を書いて舞台で上演し、日本の文化を紹介するケースもあった。

今回のワークショップで「教える」ことの本質を学んだという外国の大学教授がいた。師匠と弟子の距離感、先生が文机をたたく音や間合い、その場の緊張感など、西洋の「レッスン」にはない独特の要素が日本の「稽古」にはあるようだ。また生徒に演技指導をしている日本の役者さんも同じように教え方を学ぶために参加していた。

指導をした先生方も「教えるということは自分自身の芸の上達につながる。だから自分が教わったように教えた。それで少しでも狂言を通じて日本を知ってもらえればうれしい」と話をされていた。無報酬にもかかわらず、手を抜くことなく連日熱心な指導をされていたのはそういう気持ちがあったからだろう。

人から人へと文化は伝えられていく。と同時に教える人と教わる人の思いも伝わっていく。題材は「狂言」だが、決してそのテクニックだけではなく、もっと有意義で人間的なもの、日本の教えの文化というものがこのワークショップで伝わっているように思う。

担当者より

レベルの高いワークショップができました。

社団法人 国際演劇協会（ITI/UNESCO）
日本センター 国際理事
小田切ようこさん

毎回テキストも見直し、少しでもよいワークショップになるように努力しておりますが、徐々に海外でもその研修内容が評価されるようになり、今年は非常にレベルの高い研修生が集まりました。大変厳しい経済状況の中、AJOSCのご支援を受けて続けることができ心より感謝しますとともに、その成果をご報告させていただきます。